

『ささやき竹』考：西光坊とその周辺

安川，多映
九州大学大学院修士課程修了生

<https://doi.org/10.15017/8909>

出版情報：語文研究. 100/101, pp.94-104, 2006-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



『ささやき竹』考

— 西光坊とその周辺 —

安 川 多 映

室町時代物語『ささやき竹』は、これ自体長編と短編の二種類があるが、ほかに仏教説話や昔話、他国の民話などに類話が見られ、お伽草子の中においては破戒僧の失敗談（笑話）として分類されている。物語の構成は、姫の申し子譚、関白との恋愛譚などに分けられるが、この破戒僧「西光坊」

の「ささやき竹」という小道具を使った策略の失敗談が、物語の重要な位置を占めていることは間違いない。実際、『ささやき竹』の成立以前の類話である仏教説話は、この僧の失敗談が主題となっている。これらの仏教説話との決定的な違いは、浅はかな欲を持つて虚示現を試みた名もない老僧、もしくは若い僧が、散々な目にあい、それを戒める言葉と、女の信仰の徳で話が終わる仏教説話に対し、『ささやき竹』では、僧がかなりの力と名を持つ鞍馬の高僧で、その策略のた

めに殺された拳司、後に山の神になり、一帯の地名「僧正谷」の由来となつてしまつた所にある。この仏教説話から大きく膨らんだ僧の人物像に込められているものは何か、それについて少し探つていきたいと考える。

一、鞍馬と西光坊

まず鞍馬の僧という設定であるが、これは仏教説話『沙石集』の類話の最後に、「鞍馬ノ老僧モ、ソラ示現ノ故二坊ヲ毛牛ニ皆踏破ラレニケル事、思合セラル。常ノ物語ナレバ、委ク是ヲカゝズ。」とあり、『沙石集』が書かれた鎌倉時代には、鞍馬の老僧の失敗談として知られていたことがわかる。さらに同じ著者によつてこの後に書かれた『雑談集』には、

その鞍馬の老僧が登場する「常ノ物語」と思われる類話が紹介されている。内容は以下の通りである。

昔、さる高貴な方の子孫であつたが貧しい姫君がいた。乳母を連れて鞍馬に参詣していたところ、房主の僧正がその美しさに心を奪われる。何とかして姫君に近づこうとした老僧は、大層な装束を身につけ、紫の帽子をかぶつて金の杖をついて変装し、厨子の帳から出てくると寝ている乳母と姫君を起こし、房主の言うことを聞けば、姫君は栄えるであつたと告げた。これを聞いた乳母は神のお告げと信じ、先に房に帰つて待つていた老僧に示現の内容を告げる。すると老僧は、姫君を時々自分の元に通わせるように伝えた。乳母は意外な申し出に戸惑つたが、これもお告げであると渋る姫君を説得し、老僧が迎えにくるといふ約束をした。

老僧は、輿車では大げさになるので唐櫃を用意し、仏像を運ぶと偽つて隣の房の法師たちを迎えにやった。櫃を見た姫君は泣き伏すが、乳母になだめられて連れて行かれる。夏の暑い時期だったので、法師たちは休憩のため唐櫃を道に置き、賀茂川で水浴びをすることにした。ちょうどその時、賀茂に参詣していた摂政の子で二位の

中将という人が通りかかり、唐櫃に入れられた姫君を発見する。賀茂の利生だと喜んだ中将は姫を連れ帰ることにし、何でもよいので代わりに何か入れておけと言われた雑色たちは、近くにいた子牛を捕らえて唐櫃に入れておく。何も知らない法師たちは重くなったことを不思議に思いつつも、そのまま鞍馬へ運ぶ。老僧が唐櫃を開けると子牛が飛び出して糞を散らし、障子を皆踏み破つて散々な目にあつた。乳母と姫君は信心深かつたおかげで、富み栄えた。

この『雑談集』の話は、小道具「ささやき竹」こそ出てこないが、『ささやき竹』のあらすじにかなり近い内容になっているので、『ささやき竹』執筆の際にこれが大きく影響したことは十分考えられる。中野真麻理氏(注)はこれに加えて、鞍馬寺周辺が古来宮牛の飼育地であつたことを指摘され、この牛と姫が入れ替わる話は鞍馬周辺が源流ではないか、と推測されている。このような点を考えると、この『ささやき竹』が舞台を鞍馬寺に設定されたのは自然な流れであると考えられる。

次に、「西光坊」という老僧の名前についてであるが、この名前から様々なことが考えられる。まず、須田悦生氏(注)など

によりこれまで指摘されているのは、牛若丸が鞍馬寺に預けられた際に置かれた「東光坊」との関わりである。牛若丸を鞍馬に預けるいきさつが描かれた幸若舞の「常盤問答」では、この別当である東光坊が、牛若丸の母の常盤が山に登ることについて、常盤と激論を交わす。東光坊は釈迦が出家してからの足跡を述べ、それぞれの経典に女人を容認する文はないし、本国の山に女人を迎えたところもない、と女人禁制の立場から厳しく常盤を戒める。しかし常盤は、釈迦が昔太子であった時に妻帯しており、子供もいたことを持ち出してこれに反論するという内容になっている。一方『ささやき竹』の西光坊は、この常盤と同様に、釈迦が昔妻帯していたことを持ち出して、姫を鞍馬寺に迎えて一夜の契りを持つことの言い訳とするのである。常盤を思い留まらせるのに必死の東光坊と、姫を迎えるのに必死の西光坊、二人の対照的な部分がこの命名に影響しているとも考えられるのではなからうか。つまり、西光坊は東光坊のパロディ的要素を持つものであるともいえる。

二、慈恵僧正と西光坊

次に、『ささやき竹』において、西光坊が「僧正が谷」の

地名の由来となったとされている点から、この西光坊について考えてみたい。「僧正が谷」といえば、牛若丸が天狗から兵法を習った場所として特に有名であるが、ではほかにこの地名の由来となった話があるのかが重要になってくる。これについては、貞享元年の『雍州府志』の鞍馬寺の項の中に次のような記述がある。

又此ノ山ノ西北ニ有リ僧正谷^一山門慈恵僧正為^レ魔^ト捷^ト斯^ト谷^三云^フ

これによると、「僧正が谷」の名は、「慈恵僧正」という人物が魔となつてこの谷に住んだことによるらしい。この他慶長二十年（元和五年）の間に書かれた日重上人による『見聞愚案記』巻六にも同様の記述が見られる。更に江戸時代初期『本朝神社考』には、「僧正力谷」の項に以下のような説明を載せる。

我邦自^レ古称^{スル}天狗^ト者多^シ矣。皆靈鬼^ノ之中其^ノ較著^{ナル}者^ヲ。相称^メ曰^ク天狗^ト。是^レ非^ス蚩尤^ノ旗星^ノ之義^ニ也。其^ノ類中。鞍馬僧正^ヲ為^ス巨魁^ト。(略)又沙門^ノ之。有^ニ慢心^及怨怒^ノ者。多^ク入^ル天狗^ノ之中^ニ。(略)慈恵^ハ者。著^メ甲冑^ヲ。攻^メ三井

寺。焼ク千手院。

ここでは、この鞍馬の僧正はかなり有名な天狗であつたとされている。また、これに続けて記述される天狗となつた人々の中に慈恵僧正も挙げられており、武装して三井寺の千手院を焼いたと記されている。この慈恵僧正が「僧正が谷」の由来となつたのならば、『ささやき竹』の西光坊はこの慈恵僧正ということになる。ではこの二人に接点はあるのだろうか。まずは慈恵僧正の人物像について詳しく見ていきたい。

慈恵僧正は、名を良源といい、康保三年（九六六年）天台座主となつた、比叡山中興の祖といわれる人物である。また藤原師輔の息子を弟子とし、権力と結びついて山の繁栄を築いたことでも知られる。詳しい人物像については、以下に『東國高僧伝』の説明を挙げる。

大師諱良源。慈慧其諡號也。姓木津。近州人。母物氏。夢ニ日光入懷而生。九歲戲ニ於田野。空中有ニ瑞雲。覆ニ其頂。閻老貞ニ行公。見而異レ之。謂其父曰。此兒非ニ凡器也。善保レ之。年十一。上ニ台山。師ニ事理仙公。及レ長登壇受具。或誦戒經。光從レ口出。周遊ニ諸處。稟レ顯密二教。博學之名轟ニ人耳。嘗赴ニ維摩會。有ニ昭

法師者。南都之義龍也。且德臘俱高。源方年少。與レ之問辯。旨趣幽深。人皆嘆服。應和三年。帝召ニ諸名德。開ニ法華會於清涼殿。有ニ藏法師。立ニ定性ニ三乘不成佛之義。詞甚銳無ニ能挫者。源學ニ衆生皆成佛之旨。與レ之對辯。往復不レ已。藏曰。更深且止。明ニ六當レ抉ニ其理窟。翌日源詞鋒益熾。藏無レ言。源曰。昨有ニ抉レ窟之言。今何不レ爾。藏曰。子之才辯不レ滅富樓那。豈拙者所ニ能當レ耶。於是滿朝嘆羨。康保三年。補ニ天台座主。二十年間。百廢俱舉。天元四年。爲ニ大僧正。每レ進ニ皇宮。聽レ坐ニ車駕。永觀三年正月初三日。誦レ佛而逝。春秋七十有四矣。時有ニ紫雲ニ垂ニ庭際。以下略。

この慈恵僧正について、生前特に彼の名を有名にしたのが、俗に「応和の宗論」と言われる応和三年の法華講である。これについては『本朝高僧傳』その他にも記されており、『法華經直談鈔』においても「應和宗論之事」として、南都松室仲算と良源の宗論の様子を記している。かなり有名な論争であつたらしいが、これについて興味深い説話が残つていた。それは、元禄十年の『延命地藏菩薩經直談鈔』の巻九の四十一「牛王身ノ相并慈恵渡鴨川ノ地藏変玉フ水牛ト縁」という話である。

人王六十二代村上天皇ノ御宇應和元年^{三代紀上六}二天台法
相ノ碩学ヲ召テ宗論アリシニ慈惠僧正八比叡山西坂ヲ下
リ松ノ邊ニ車ヲ儲サセテ下洛シ玉フニ鴨河ノ水漲リ出デ
逆浪岸ヲ浸シ范范タリ牛童轅ヲ扣ヘ如何ト立タルトコロ
ニ慈惠心中ニ地藏ヲ念ジ玉ヘ八忽チ水牛一頭水中ヨリ游
ギ出テ車ノ前ニゾ喘ケル僧正此ノ牛ニ車ヲ掛替テ水中ヲ
渡セト仰ケルニ牛童命ニ随ツテ水牛ニ車ヲカケ一鞭ヲ當
ケレバ飛ガ如ク走り出デ車ノ轅ヲモ濡サズ浪ノ上三干餘
町ヲ游ギアガリ内裏ノ陽明門ノ前ニテ水牛八掻消ヤウニ
失ケリト是地藏菩薩牛王身示現ノ證ナリ

これは宗論前の出来事を記したものであるが、更に『太平記』
にはこれに続けて、宗論を聞いていた慈惠僧正の牛車の牛が
流していた涎は芳しい香りがして、それが一首の歌になった
という話も見られ、これらがよく知られた話であったことが
うかがえる。ここに慈惠僧正と牛の繋がりが見えてくる。更
にこれらの話の中で水牛が現れた場所とされている賀茂川の
ほとりは、『ささやき竹』に最もあらずしが近い仏教説話
『雑談集』で、姫と牛が入れ替わる場所である点に注意した
い。

また『ささやき竹』の冒頭は、「抑、人皇六十二代の帝の

御時」という文で始まっているが、この始まりは、『延命地
蔵菩薩經直談鈔』のこの説話に共通している。『ささやき竹』
に出てくる登場人物はすべて室町期の人物であるという指摘
は、中野真麻理氏によってすでになされているが、それにも
かわからず『ささやき竹』が村上天皇の時代と設定している
のは何故か。それは、村上天皇の時代に活躍したこの慈惠僧
正の説話が裏にあったからではないのだろうか。慈惠僧正は
「才辯不滅富樓那」で有名だったらしいが、『ささやき竹』の
西光坊も「富樓那の辯舌にもすぐれたる法師」だったのだ。
そして西光坊が祈っていた不動明王については、慈惠僧正も
これを信仰し、自分が居住することになった楞嚴院に像を造つ
てわざわざ祀っている。『沙石集』巻第一の三「出離ヲ神明
ニ祈事」には、「村上ノ御宇」として、慈惠僧正が祈祷の際
に、不動明王に変じている説話を載せる。

村上ノ御宇ノ事ニヤ。内裏ニテ五壇法修セラレケルニ、
慈惠僧正八中壇ノ阿闍梨ニテオウシケルガ、御門竊ニ御
覽ジケルニ、行法ノ中ニ不動ニ成テ、本尊ニ少シモタガ
ヒ給ハズ。

更に『法華經直談鈔』巻五の十三「慈惠護摩之事」には、慈

恵僧正が、不動明王の夢告によって天台座主になることを決意した話もある。このような点を考えても、西光坊に慈恵僧正が投影されている可能性は高いといえるだろう。

三、慈恵僧正と鞍馬寺

では、この慈恵僧正と鞍馬寺には何かつながりがあるのか。次にそれについて見ていきたい。

慈恵僧正はその業績や行力を讃える逸話とともに、気性の激しさや魔となったことを語る説話が多く残されている。『本朝神社考』にある三井寺の記述も、彼の時代に三井寺（寺門派）との対立が始まったことによると考えられる。とりわけ往生せず山に残っているという話は、山門や対立していた寺門派の両方で語られており、死後天狗になったという説も『宝物集』や『比良山古人霊託』、『太平記』などに見られ、よく知られた説であった。五来重氏は『寺社縁起からお伽話へ』の中で、「比叡山では元三大師はつねに山をめぐりあるいて、怠惰な僧徒に天罰をあたえたと信じられている。これは良源が死後は魔王身となって衆生の生死の魔怨をのぞき、邪魅災難を払う誓願をたてたからだというのである。」と述べられているが、肯定派に見られるこの「慈恵＝魔王身」

の説の中心はこのような解釈であった。これについては若林晴子氏（注4）が、鎌倉・室町時代の講式や画賛において慈恵僧正の魔の大将としてのイメージが現れるようになり、いくつかに「現作魔王身」という表現が見られることを指摘されている。一方、否定派の「慈恵＝魔王身」の説は、『宝物集』において、「延暦寺に執着して金の天狗となった」と記されているように、慈恵僧正のその気性の激しさからくる比叡山や権力への執着故に、いわゆる人々に災いを為す魔となったという解釈である。このような説については『今昔物語集』においても、「良源僧正、成靈来観音院伏余慶僧正語」というタイトルのみ残る説話が存在しており、これについて他の説話類から内容を考察された松田宣史氏（注5）によると、死後怨霊となった良源が、生前に恨んでいた余慶を取り殺しに来る話であるらしい。若林氏は、このような否定的な慈恵僧正の魔王のイメージに対抗して、肯定的な魔王のイメージが出てきて定着していったとされているが、これは、魔となった西光坊が、後に山の神として崇められていく状況に似ている。

さてこの「魔王」に関してであるが、鞍馬寺には僧正が谷のさらに先に「魔王尊」を祀る奥の院があり、この魔王尊が牛若丸に兵法を授けた天狗であるとされている。この奥の院の魔王尊については、様々な魔障を征服し屈服させて、善魔

に転向させる大王であるともされていたらしく、魔王身となつた慈恵僧正に通じるものがあるのである。また、『本朝神社考』において、天狗となつた慈恵僧正の振る舞いの中で「著甲冑」という表現があつたが、慈恵僧正が座主の時に僧兵をつくつたという説は中世において広く知られていたらしく、『太平記』においても「慈恵僧正貫頂たるの後、忍辱の衣の上に、魔障降伏の秋の霜を帯ぶ。」といった表現が見られる。これらを考えるとき、魔王身になつたとされた慈恵僧正が鞍馬の僧正坊と結びつく要素はあつたといえるであらう。

更に、先ほど述べた慈恵僧正が楞嚴院に不動尊を建立したという点についてであるが、この楞嚴院には元々は観音と毘沙門天が安置されており、慈恵僧正が不動尊を加えて、変則的な三尊並立にしたために、これ以後各地でこの三尊の形がとられるようになったらしい。この観音と毘沙門天の二つが安置されているのは、鞍馬寺も同様である。鞍馬寺の創設については、『今昔物語集』のほか『鞍馬蓋寺縁起』などにも記されるが、次の『拾遺往生伝』巻下二にも、これらとほぼ同じ内容を載せている。

鞍馬の根本別当峰延は、東寺の十禅師なり。ここに造東寺長官従四位上藤原朝臣伊勢人常に願ひて曰く、争で

か勝地を得て、道場を建立し、観音の像を安んぜむといふ。時に夢みらく、城の北に一の深山あり。この裏にて一の老人に逢ふ。齢八十強にして、鬢髪幡々たり。即ち相示して曰く、この地の勝、天下に甲れたり。山は三鉢に似て、雲は五色を乗ふ。汝仏堂を建てて、自他を利益せよといふ。伊勢人問ひて曰く、公を誰何とかなすといふ。答へて云はく、王城の鎮守、貴船明神なり。汝の道心に感ずるが故に、来り告ぐるところなりとのたまへり。この夢ありしといへども、いまだその処を知らず。常に騎り用ゐたる白馬あり。鞍を被きて謂ひて曰く、昔後漢の明帝、夢に金人を見しが、摩騰・竺蘭、聖教を白馬に載せて、西域より来りけり。汝また吾が夢に感じて、必ずその地を示せ、云々といふ。即ち白馬を放ちて、従ふに青童をもてす。漸くに北山の上に到りて、已に緑萱の中に駐りぬ。童子帰りて告ぐ。主人行き望みて、この地を廻り見るに、昔の夢に異らず。その萱草の中に、毘沙門天の像を見得つ。始めて一堂を建てて、件の像を安置せり。故に鞍馬寺と号づくるは蓋これなり。伊勢人常に思へらく、吾、観音の像を造り奉らむの願ありて、今毘沙門天の像を安んじたり。尚素意にあらずとおもえり。この時夢みらく、一の童子あり、年十五、六ばかりなり。

告げて云はく、汝当に観音と多聞とは、名異にして体同じなることを知るべし。譬へば般若と法花とは、名と体と異なるがごとしといへり。夢の後にこれを信じたり。

これらによると、鞍馬寺は、藤原伊勢人が観音を奉らうとしてよい場所を探したが、霊夢によって見つけた場所には毘沙門天があつたため、まず毘沙門天を祀り、後に観音も祀るようになったという経緯を持つ。加えて僧正が谷には不動尊があるのである。そしてこれとは別に、慈恵僧正が往生したその時、鞍馬に参詣していた人が台山に紫気が上るのを見て、慈恵僧正が往生したことがわかつた、という記述も『後拾遺往生伝』にある。このように見ると、鞍馬寺と慈恵僧正が結びつく可能性はあり、この『ささやき竹』の西光坊が慈恵僧正の影響を受けていることは十分考えられる。その場合、この地名由来譚は、鞍馬の大天狗僧正坊の誕生譚、もしくは高僧がなぜ天狗になったのかを語る物語といえるであろう。

四、西光坊と御菩薩池

次に、別の角度から西光坊について考えたい。先ほど『雑談集』で姫と牛が入れ替わる場所が賀茂川のほとりであると

いうことについて言及した。この『雑談集』は先述したとおり『ささやき竹』に最もあらずしが近く、『ささやき竹』成立に何らかの影響を与えたことは間違いないと思われる。しかし、『ささやき竹』においては、姫と牛が入れ替わる場所は「御菩薩池のあたり」となっているのである。ここは六地藏のひとつが置かれている場所らしいのだが、ここに一体どのような意味があるのだろうか。

『延命地藏菩薩経直談鈔』には「山州洛外六地藏菩薩」の中で、「一番御菩薩池地藏尊、一番山科地藏尊：（中略）六番太秦地藏尊」として挙げた上に、更に「此六地藏八小野篁ノ雕刻ニソ本八伏見太善寺ニ安置ス是ニ由テ此所ヲ六地藏ト云其ノ後平ノ清盛公右ノ六所ニ配立シヌ厥後西光法師七月廿四二順礼ヲ始メ玉フトナン具ニ八前二註ス」と加えてある。

この「具ニ八前二註ス」の部分、巻三の四十三によると、この六地藏は昔小野篁が閻王の勅を受け、自ら地藏像六体を造つて太善寺に安置していた。その後文徳天皇が七月二十四日に宝殿を造るなどして手厚くもてなし、更に陽成、村上、白河天皇もこれを尊んだ。そして後一条天皇の時代に疫病がはやつた際、祈陀林寺の仁康法師の夢に地藏が異僧の姿で現れ、人々に六地藏に礼拝すれば疫病はおさまると伝えるよう告げた。それを聞いた人々がこぞつて六地藏に礼拝すると、疫病は止

んだとある。更に続けて、「ここから注目して欲しいのだが、保元二年後白河天皇の時、平清盛が地藏の靈威を人民に礼偈して欲しく思い、地藏を前述した六ヶ所に分けて置き、太善寺のあつた村を六地藏村と名付けた。その後西光法師が七月二十四日から六地藏巡礼を始め、人々に勧めた。それから人々もこれに習って巡礼を行うようになった、というのである。時代が下つた地誌ではあるが、『洛陽十二社靈驗記』の「美呂池地藏」の項に、この部分について更に詳しく述べたのである、以下にそれを挙げる。

地藏靈驗記に云大相國入道^{清盛}兵亂の程の罪障消滅を欲せらるゝより願心起りて元來地藏は道路に誓あれば都に入路六方に在ますに往來の者の結縁とも爲ぬべし利濟普く遠路の難を除き海路の危きを救ひ國家を守り給へと城門の六の巷に各堂を立て（中略）篁の木像は兵亂を経て所々に散し失たりしを右の時に清盛入道志願を起して地藏の石像造立し其所々に安置する事を西光法師に司どらしめたりしなるべし毎年七月二十四日當國の男女其六所當村 鳥羽 常盤 桂 六地藏 山科を巡詣するを六地藏巡りといふ又一説に往昔同所の池中より地藏菩薩出現し給へりしを即同村の中に安置す六地藏の隨一なり此

故を以て御菩薩池の稱あるなりといへり

これによると、平清盛が西光法師に六地藏の石像をそれぞれ六ヶ所に安置させた。御菩薩池はその一つであり、しかも池の中から地藏菩薩が出現した最も靈驗あらたかな場所であるという。また、ここで注目すべきは平清盛が命じたという点である。『古今著聞集』卷二の「慈心房尊惠閻魔王の崛請に依りて法華經轉讀の事」という話の中に、これについて興味深い記述がある。攝津国清澄寺の慈心房尊惠が、閻魔王から法華十萬部の転読に招待されるのだが、帰る前に閻魔王に次のようなことを言われるのである。

攝津國に往生の地五カ所あり。清澄寺そのうちなり、汝順次往生疑ふ事なかれ、太政入道清盛は慈惠僧正化身也、敬禮慈惠大僧正、天台佛法擁護者、かく唱へ給て、すみやかに本國に歸て、往生の業を上げむべし

同様の話は『平家物語』でも見られるが、ここにまた慈惠僧正が関連する。慈惠僧正の化身が平清盛で、その清盛が西光法師に命じて御菩薩池に六地藏を置かせるのである。『ささやき竹』において姫と牛が入れ替わる場所がこの御菩薩池な

のは偶然だろうか。更にこの御菩薩池には、『ささやき竹』の姫君の誕生とよく似た子宝祈願の説話も残っていることが『洛陽十二社靈驗記』に記されている。慈恵僧正が助けられた牛は地藏菩薩の化身であったし、清盛が命じた僧の名は西光法師なのである。この西光法師は色々と策略をめぐらした挙句清盛に捕らえられ、その場で清盛を嘲つたため体を引き裂かれて殺されるといふ人物であり、策略と口が災いして酷い最期を迎えることになった点で西光坊と重なる。そして『平治物語』には、この西光法師が出家前、仕えていた信西を仲間と共に土に埋めた際、竹の節を抜いたものを息継ぎのために用いて挿しておいたという話も残る。これらの設定が西光坊に影響していると考えられることではないか。

以上、様々な説話を元に、『ささやき竹』における西光坊の人物像の背景について考えてみた。これらの説話は西光坊と牛や地名などを繋ぎ、それぞれの設定により深い背景があることを垣間見せてくれるのである。今後更にこれらを一一つ紐解いていきたいと考える。

注

- 注1 中野真麻理「鞍馬の黒牛―『ささやき竹』攷」(『説話論集』第五集、清文堂出版、平成八年)
- 注2 須田悦生「中世小説『ささやき竹』をめぐる諸問題」(『静岡国文学』昭和五十一年)
- 注3 五来重「寺社縁起からお伽話へ」(角川書店、平成七年)
- 注4 若林晴子「中世における慈恵大師信仰―魔のイメージを中心に」(『芸能の中世』五味文彦編、吉川弘文館、平成十二年)
- 注5 松田宣史「今昔物語集」巻第二十「良源僧正、成靈采観音院伏余慶僧正語第八」本文考―観山文庫蔵『依正秘記』山門要記に見える説話―(『比叡山仏教説話研究―序説―』、三弥井書店、平成十五年)

【参考文献】

- 『ささやき竹』(岩波書店新日本古典文学大系「室町物語集上」、角川書店室町時代物語大成第六巻)
- 『沙石集』(岩波書店日本古典文学大系「沙石集」)
- 『雑談集』(三弥井書店中世の文学)
- 『雍州府志』(臨川書店新修京都叢書第十巻)
- 『本朝神社考』(現代思想社続日本古典全集「本朝神社考」)
- 『東国高僧伝』(大日本仏教全書「続日本高僧伝 東国高僧伝」)
- 『本朝高僧傳』(春陽堂大日本文庫仏教篇「本朝高僧傳」)
- 『法華経直談鈔』(臨川書店、昭和五十四年)
- 『延命地藏菩薩経直談鈔』(勉誠社、昭和六十年)
- 『宝物集』(比良山古人霊託)(岩波書店新日本古典文学大系「宝物集 閑居友 比良山古人霊託」)
- 『古都巡礼 京都 鞍馬寺』(淡交社、昭和五十三年)

- 『太平記』（小学館新編日本古典文学全集 『太平記』）
『今昔物語集』（岩波書店新日本古典文学大系 『今昔物語集』）
『鞍馬蓋寺縁起』（『修驗道史料』 山岳宗教史研究叢書十八、名著出版、昭和五十九年）
『拾遺往生伝』 後拾遺往生伝（岩波書店日本思想大系 『往生傳 法華驗記』）
『洛陽十二社靈驗記』（臨川書店新修京都叢書第五卷）
『古今著聞集』（岩波書店日本古典文学大系 『古今著聞集』）
『平家物語』（岩波書店新日本古典文学大系 『平家物語』）
『平治物語』（岩波書店新日本古典文学大系 『保元物語 平治物語 承久記』）

（やすかわ たえ・本学大学院修士課程修了生）